る様黨に要求する。

理由

無産政黨の合同問題！戰線の統一！それは今日迄幾度か各黨の間に繰返され、そして總選擧後特に第三者的（何等責任を持つて現實の闘爭に參加してゐない者）大衆から全無産政黨の合同が、輿論として唱へられるに到り、各黨の幹部及大衆も合同に關して可成熱意ある如く表面的に種々なる一片の聲明書を出し又世間的大衆の輿論に答へた。（勿論中には眞劍に合同の熱意を持つた幹部も黨も、大衆もあつた事は事實である）

これ等の輿論の結論は結局左の二つに分れた。

一、全的合同を主張するもの

一、單獨合同を主張するもの

吾等は今、全民、大衆の兩黨の合同の必要を說く前に一應全的合同が結局、此の合同論者が稱へてゐる如く資本の攻勢に對抗する爲の合同へと具體的に成果を結び得ない點を明にせねばならぬ。

先づ此の合同論が何故に各黨の幹部や大衆が稱へるに到つたかと云へば、一つは前記第三者的大衆の合同輿論に煽動されて主張する理想論的合同論が生れた。これ等の人々は大衆が合同を要求して泣いてゐるといふ―その大衆とは第三者的責任なき大衆だ、今一つは、單獨合同が完成されることに依つて自己の英雄的立場と自黨の存在が毒牙となる事を見越して、丁度幸に全的合同が喧しく叫ばれてゐるに相應呼して全民、大衆の兩黨の合同を妨害せんが爲の表面的、形而的、合同論者になつて全的合同を唱へてゐる。

斯くして全的合同論は益々表面的に實現の可能あるものゝ如く唱へらるに至り、一般的に現實に各黨内の實狀を知らぬ合同フワンは今にも全的合同は出來る樣に早合點をした。併し乍らそれは一つの夢にすぎなくなつた。

全的合同論者は大衆の聲だ！無産戰線の擴大强化のためだ！と主張して來た手前全的合同の協議會を開催する必要に迫られて、それを勞農黨が提唱した。だが今迄八釜しく全的合同を主張してゐた各黨は此の提唱に何んと答へたか社民は拒絶し、大衆黨は條件を出し、地方無産の反勞農黨系は尻込みを左す形勢にある。斯くして此の提唱は結局全的合同フワンを喜ばした丈けで、少しも具體的に効果的に全的合同に進んでゐない。

それは大衆への申譯けのために各黨が合同の懸引を巧くやつたにすぎぬ。こんな事で目を送つてゐる間に資本家、地主の露骨な攻勢は大衆の頭上にヒシ〳〵とのしかゝりつゝあるのだ　資本の攻勢に對抗する爲めに勞農大衆の闘爭力を擴大强化する必要から全的合同を主張してゐたではないか。大衆が全的合同をそれ程に望んでゐるのなら、何故に此の全的合同を所謂大衆の壓力で完成さゝないのだ。

單獨合同を主張するものを反動的分裂主義者であると慢罵する者がゐるが、それはお門違ひであつて、自ら全的合同の大義名文に捕れて、具體的合同の實現を妨害した巧妙なる分裂主義者でないか。俺達は現實性の合同こそ今日の急務と考へてゐる。

更に又指導精神を問題にしてはいかぬ。指導精神を云々するのは自身の指導精神の貧弱さを物語るものであると共に永久に合同は不可能であるといふ。誠に小兒欺しの非唯物論的な考へ方をする狂想的合同論者である。一定の指導精神は資本主義の客觀的狀勢に適應して、味方の闘爭の試錬の結果生れ、規定されるものだ。かくして一つの指導精神が確立され、その科學的理論のもとに戰略、戰術を規定するのである。この指導精神と猫の眼の如く變り行く指導精神とは對立するのは當然であるが、さりとて指導精神は永久不變のものでない。敵の陣容と攻勢の方法、味方の闘爭力の變遷は、必然に新しい指導精神を必要とするのだ。斯の如く一定の戰利に同じ立場と考へ方に立つ全民、大衆の合同こそ當然であると共に、我等は認識の誤れる指導精神を有する無産黨があれば、それは現實の闘爭を通じ克服し同一の立場と方針と考へ方を持つことに依つて初めて合同は可能となる。

更に彼等は大衆黨との合同を妨害せんが爲に同黨内に社民以上の懸引をするグラ幹が居るとデマを飛す。若し居るとすれば結黨後、事實を調べて除名なり脫黨なり。さすれば良いのだ。黨は少數幹部の利己的道具にされる爲に作つてゐない。黨内の大衆が合同を要求してゐるのに幹部が惡いからとて、それは合同には事實上無關係である。戰闘力の强大化の爲に吾等はこんな一片のデマに此の大合同を妨害されてはならぬ。

最後に彼等は共同闘爭を通じて全的合同へ！と主張して居るのだが諸君！共同闘爭は兩者が充分の理解と融合があつて初めて有利に行ひ得るのだ。どんな野望と計畫とを内藏して來るかも見分ける事の出來ないものと、どうして共同闘爭が出來るか。例へば一つの爭議の場合、各黨間の戰術、應援の方法がマチ〳〵で委員會にて議が決まらず、對立のまゝでやられる場合が可成ある。それのみか表面は賛成して實際の闘爭に這入ると全然反對的な行動せる場合も可成ある。――そうするとその爭議團は良いナブリ物で結局彼等の對立の道具に供せられる。勿論こんな惡い場合のみであると云はないが只だ一つ二つ僅かの人で共同闘爭が甘く行つたら、全體的に甘く行くと見考へるのは、井戸の中の蛙の考へ方と同じである。